



④ 廃藩置県の布告 (1871年) (聖徳記念絵画館蔵)

廃藩置県を武士はどう受けとめたか Column

北陸の福井藩に、アメリカ人のグリフィスという人が藩校の教授として来ていた。廃藩置県の知らせが東京からとどいたとき、失業することになる藩の武士たちは憤慨して大騒ぎとなった。しかし、その渦中にあっても、知識のある武士たちは「これからの日本は、あなたの国やイギリスのような国々の仲間入りができる」と意気揚々と語ったことがグリフィスの日記に書かれている。

旧幕臣の福沢諭吉は「一身にして二生を経るが如し(まるで一生に二つの人生を生きる思いだ)」と述べ、廃藩置県の知らせを聞いたら死んでもよいと、感激して友人に書き送った。先見の明のある武士は、改革の必要性をよく理解していたのである。

49

中央集権国家への道

♣ 政府を中心とする中央集権国家はどのようにして成立したのだろうか。

① 当時は版籍奉還により知藩事という職名だった。

② 国家を統治するためのさまざまな権限が、中央政府に集中している政治のしくみを中央集権制という。← 地方分権

版籍奉還

戊辰戦争に勝利したとはいえ、新政府は諸藩の連

合体で、その基礎は不安定だった。新政府内では各藩の意向を常に配慮する必要があり、日本国全体の立場から改革を行うことに困難が付きまとった。また、国内が多数の藩に分かれたままでは、いつなんどき外国勢力につけこまれないとも限らなかった。国内の統一は急務だった。

そこで、新政府の中心となっていた薩摩、長州、土佐、肥前(佐賀県・長崎県)の4藩は、1869(明治2)年、藩主が願い出てその領土(版)と人民(籍)を天皇に返還し、他の藩もあいついでこの動きに従った(版籍奉還)。この版籍奉還によって、全国の土地と人民は天皇(公)のものとなったが、実質的な支配権は、あいかわらず各藩に残されていた。

廃藩置県

1871(明治4)年、大久保利通ら新政府の指導者た

ちは、全国の藩を一挙に廃止する改革についてひそかに相談を始めた。そして、薩摩・長州・土佐の各藩から集められた天皇直属の約1万の御親兵を背景に、7月、東京に滞在していた元藩主たちを皇居(もとの江戸城)に集め、天皇の名において廃藩置県の布告をいい渡した。

廃藩置県は、分権的な制度である藩を廃止して、中央集権制のもとでの地方組織である県を置くことであり、藩に残されて

